様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３４４１６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ００１７６

研究課題名（和文）耳鳥齋の戯画と日本戯画史の構築

研究課題名（英文）Establishment of the History of Japanese Caricature by analyzing works of Nichosai.

研究代表者
中谷　伸生（NAKATANI, Nobuo）

関西大学・東西学術研究所・非常勤研究員

研究者番号：９０２４７８９１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：　江戸時代における大坂の戯画作者である耳鳥齋の戯画作品に焦点を当てて、日本の戯画史を成立させることを目的とした研究である。滑稽な戯画を描いた耳鳥齋は、与謝蕪村の戯画と同様に、日本のマンガの源流にあたるのかどうかも研究の要点となる。
　日本の戯画史の流れは、平安時代に描かれた《鳥獣人物戯画》から現代のマンガに至る歴史であるが、それらが歴史的に連続した流れと考えられるのかどうかは分からない。本研究では、耳鳥齋を中心にして、日本の戯画の特質を考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義は、江戸時代に耳鳥齋によって描かれた戯画などが、現代のマンガの源流だと考えられるのかどうか、という重要な問題を考察したことである。この疑問の解消は難しくて、簡単に結論を言えないが、そこには何らかの関係性があるのではなかろうか。また、平安時代に描かれた絵巻《鳥獣人物戯画》が、江戸時代の戯画につながるものかどうか、そしてさらに現代のマンガにつながるのかどうかは興味深い疑問である。クールジャパンと呼ばれて人気のあるマンガやアニメーションの源流を探る研究には社会的な意義がある。

研究成果の概要（英文）：　This study aimed to re-establish the history of Japanese caricatures, by analyzing the works of Nichosai, an Osaka caricature painter in the Edo period. He left behind many humorous caricatures. This study argued whether his paintings could be considered one of the origins of modern Japanese manga or not, as is the case with Yosa Buson's caricatures . Japanese caricatures are known to have originated in "Choju-jinbutsu-giga", drawn in the Heian period, which have eventually developed into modern manga. However, the history may not be so straightforward. In this study, I pointed out the characteristics of Japanese caricatures, through examining the works of Nichosai.

研究分野：日本美術史

キーワード：耳鳥齋　大坂画壇　与謝蕪村　戯画　マンガ　アニメーション　戯画史　江戸時代

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

（１）背景と動機

研究を開始する動機の一つとして、大坂で活動した耳鳥齋の戯画作品と文献が、関西大学図書館に多数所蔵されており、それらの資料を基盤として耳鳥齋の調査研究を行うという背景があった。耳鳥齋については、大坂画壇の有力な戯画作者であることから、関西大学にとって有意義な研究対象であることはいうまでもない。

（２）関西大学 KU-ORCAS における研究

また、報告者（中谷伸生）は、文部科学省私立大学研究支援事業のために作られた組織「関西大学アジア・オープン・リサーチ・センター（KU-ORCAS）」に所属している非常勤研究員で、本センターが手掛けている大坂画壇資料のデジタル化にも着手しており、耳鳥齋についても、調査研究を積み上げてきた。そうした資源を駆使して、耳鳥齋を日本戯画史の中に位置づけるというのが本研究の趣旨である。

（３）耳鳥齋アーカイブズ

さらに、大阪の各地には、耳鳥齋や大坂画壇関係の作品や文献が膨大に遺存しており、調査研究を開始するには絶好の環境である。また、報告者は、日本美術史研究を専門としており、これまでに耳鳥齋についての研究書『耳鳥齋アーカイブズ－江戸時代における大坂の戯画－』（関西大学出版・2015 年刊）を出版していることから、本研究の開始にあたっては、充分な研究蓄積と準備ができていた。

（４）マンガ・アニメーションの源流か？

加えて、世界中で流行している日本のマンガ・アニメーションの源流に、耳鳥齋らの江戸時代の戯画があると考えるのかどうかも興味深い問題である。そうしたさまざまな課題を踏まえて、日本戯画史の中に耳鳥齋を位置づける研究は、大きな意義をもつこと必定である。

２．研究の目的

（１）目的について

研究の目的は、まず、耳鳥齋の戯画作品と文献資料の収集で、それを実行するために、大阪を中心にして、京都府、兵庫県、愛知県、福岡県、東京都などに調査旅行を行い、耳鳥齋の全容を把握して、その理解を深め、デジタル化を含めて、資料のアーカイブ化を目指した。それらの資料を駆使して、耳鳥齋を日本戯画史の中に位置付け、長らく忘れられていた耳鳥齋の評価や歴史的意義を追究した。

（２）耳鳥齋の時代と京阪の画家たち

耳鳥齋研究は、従来の日本美術史や日本戯画史に反映されることが少なかったので、本研究によって、新たな学問領域を開拓することに大きな意義があったと理解している。こうした研究は、耳鳥齋のみならず、その周辺の江戸時代の画家たち、たとえば京阪で活動した与謝蕪村、上田公長、中村芳中、岡田米山人、林文坡らの画家たちの戯画的作品をも照射する重要性を示している。

３．研究の方法

（１）耳鳥齋の戯画と文献の調査

かなりの数の作品を遺した耳鳥齋の生涯とその事績を追うには、まず、大阪府を中心にして日本各地の作品および文献調査を行う必要がある。調査した資料をデーターベースにして、研究の土台を作り、江戸時代の戯画作者がいかなる活動をおこなっていたかを跡づける。同時に、周辺の戯画作者の作品群を調査研究して、耳鳥齋の全体的な理解を深める。

（２）耳鳥齋と日本戯画史と近代マンガ

（１）で進めた調査研究を用いて、耳鳥齋を日本戯画史の中に位置づけ、耳鳥齋とその戯画が歴史的にいかなる意義を有していたかを明らかにする。また、こうした江戸時代の戯画が、明治時代以降にどのように継承されたか、あるいは断絶したかを研究し、ひいては、近年、クールジャパンの一環として人気のある日本のマンガ・アニメーションといかなる関係があるのかを追究する。

４．研究成果

（１）耳鳥齋とその周辺の画家たち

耳鳥齋とその周辺の画家たちを調査研究する場合、まず、大坂の木村兼葭堂の名前を上げねばならない。18 世紀から 19 世紀にかけての大坂では、何と言っても兼葭堂が中心であり、耳鳥齋も兼葭堂宅を訪れている。兼葭堂に関しては、拙稿「木村兼葭堂はなぜ笑っているのか－研究をめぐる疑問と課題と仮設－」（『東アジア文化交渉研究』第 13 号、』、2020 年 3 月刊行）の研究論文を発表しており、広く大坂の絵画を俯瞰する内

容である。

（2）大坂の写生派と戯画

また、文人画と並んで大坂の社会を席巻した写生派（四条派）の画家たちもまた重要である。それについては、拙稿「大坂画壇における四条派」（『大阪商業大学商業史博物館紀要』第 19 号、2018 年刊行）の論文で、耳鳥齋の時代に活動していた大坂の写生派画家たちを採り上げたが、さらに、その特質を論じた拙稿「大坂の四条派画家たちの特質」（『関西大学博物館紀要』第 25 号、関西大学博物館、2019 年 3 月刊行）の論文で、「大坂らしさ」とは何かについて言及した。というのも、耳鳥齋の戯画は、まことに大坂らしい作風だと考えられ、江戸や京とは異なる大坂の特質が「戯画」に反映されたと考えられるからである。ともかく、大坂はマンガ風の戯画の宝庫で、こうした戯画的作風は、大坂以外の土地ではあまり流行らなかったといってよい。

（3）大坂の戯画と京都

さらに大坂四条派を拡大して論じた拙稿「長澤蘆雪と大坂画壇」を『東アジア文化交渉研究』第 12 号、2019 年刊行に、そして、拙稿「長澤蘆雪－流派を越えて－」を『関西大学東西学術研究書紀要』第 52 輯、2019 年刊行に掲載し、戯画的性格をめぐって、蘆雪と耳鳥齋との関連を述べて、大坂と京との戯画的作風の広がりに言及した。なお、この研究は、スイスのチューリッヒ大学で開催された「蘆雪シンポジウム」で発表したものを活字化したものである。

（4）近代の絵画から戯画へ

また、日本戯画史の構築という課題にとって近代美術も重要で、それがマンガ・アニメーションへと繋がっていく布石であることはいうまでもない。その観点で、近代絵画については、大坂の美人画家の北野恒富を論じた拙稿「北野恒富の水墨技法による日本画」、『関西大学文学論集』第 70 巻第 4 号、2021 年刊行、および近代大坂の写生派を扱った「深田直城の大阪写生派絵画と日本画の近代」、『東アジア文化交渉研究』第 14 号、2021 年刊行に掲載し、日本美術史と日本戯画史を合わせた流れを追究した。深田直城は、平明な写生的絵画を描くと共に、まさにマンガといえる戯画も描いており、半ば忘れられた画家ではあるが、日本戯画史にとっては欠くことのできない優れた画家である。

（5）《鳥獣人物戯画》と耳鳥齋、そして日本戯画史の流れ

最後に、日本戯画史の構築にとって避けられないテーマが平安時代に制作された《鳥獣人物戯画》と耳鳥齋との関係である。これについては、拙稿「耳鳥齋は《鳥獣人物戯画》を継承したのか」という論文を雑誌『ユリイカ』通巻 771 号（青土社、2021 年刊行）に掲載し、中世から江戸時代に至る戯画的作風とその思考について一考を論じた。

以上の研究成果から、耳鳥齋という戯画作者の特質が明らかになり、また、同時代の戯画作者や戯画的作風の広がりも理解できる。耳鳥齋や与謝蕪村らの戯画が、近代・現代のマンガ・アニメーションの源流だと言えるかどうかは、きわめて難しい判断を求められる重大な問題である。また、平安時代の《鳥獣人物戯画》が耳鳥齋らの江戸時代の戯画に繋がるものかどうかは、判断に困るが、それらは直接の関係は無いと思われるにしても、耳鳥齋が《鳥獣人物戯画》の作者に擬せられた鳥羽僧正覚猶に憧れていた事実は無視できない。ということは、江戸時代に至るまで、《鳥獣人物戯画》という絵巻は、戯画風の作品に、圧倒的な影響を与える存在であったことが判明する。

「耳鳥齋の戯画と日本戯画史の構築」という研究課題は、壮大なテーマであるため、本研究で簡単に結論を提出するとか、また、安易な戯画の歴史を編むことは避けねばならない。しかし、本研究によって、その大きな流れが多少とも明らかになったと言えるのではなかろうか。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計15件（うち査読付論文　9件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 中谷伸生	４．巻 第13号
２．論文標題 木村兼葭堂はなぜ笑っているのか－研究をめぐる疑問と課題と仮説－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 東アジア文化交渉研究	６．最初と最後の頁 31－57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中谷伸生	４．巻 第１巻
２．論文標題 日本美術史の現在を問う	５．発行年 2020年
３．雑誌名 井上克人古希記念論集	６．最初と最後の頁 143－168
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中谷伸生	４．巻 第26号
２．論文標題 深田直城《寒山拾得（下絵）》及び『人物・花鳥・海魚』素描	５．発行年 2020年
３．雑誌名 関西大学博物館紀要	６．最初と最後の頁 122－136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中谷伸生	４．巻 第39号
２．論文標題 坂本泰漣－透過する素材の向かうところ	５．発行年 2019年
３．雑誌名 美術フォーラム21	６．最初と最後の頁 12－19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中谷伸生	4．巻 第52輯
2．論文標題 長澤蘆雪－流派を越えて	5．発行年 2019年
3．雑誌名 関西大学東西学術研究所紀要	6．最初と最後の頁 3－14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中谷伸生	4．巻 25号
2．論文標題 大坂の四条派画家たちの特質	5．発行年 2019年
3．雑誌名 関西大学博物館紀要	6．最初と最後の頁 100－124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 中谷伸生	4．巻 12号
2．論文標題 長澤蘆雪と大坂画壇	5．発行年 2019年
3．雑誌名 東アジア文化交渉研究	6．最初と最後の頁 3－21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 中谷伸生	4．巻 19
2．論文標題 大阪画壇における四条派	5．発行年 2018年
3．雑誌名 大阪商業大学商業史博物館紀要	6．最初と最後の頁 5－20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中谷伸生	4．巻 86号
2．論文標題 陳進と膠彩画（日本画）の文化交渉	5．発行年 2018年
3．雑誌名 南島史学	6．最初と最後の頁 １－14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 中谷伸生	4．巻 51輯
2．論文標題 中西家（吹田市岸部）旧蔵の作品群－絵画を中心に工芸など－	5．発行年 2018年
3．雑誌名 東西学術研究所紀要	6．最初と最後の頁 3－14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 中谷伸生	4．巻 772号
2．論文標題 耳鳥齋は《鳥獣人物戯画》を継承したのか	5．発行年 2021年
3．雑誌名 ユリイカ	6．最初と最後の頁 142－150
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中谷伸生	4．巻 70
2．論文標題 北野恒富の水墨技法による日本画	5．発行年 2021年
3．雑誌名 関西大学文学論集	6．最初と最後の頁 67－88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中谷伸生	4．巻 14
2．論文標題 深田直城の大阪写生派絵画と日本画の近代	5．発行年 2021年
3．雑誌名 東アジア文化交渉研究	6．最初と最後の頁 27－44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中谷伸生	4．巻 42号
2．論文標題 英米の日本絵画コレクションと日本美術史研究－ジャック・ヒリアーをめぐる考察	5．発行年 2020年
3．雑誌名 美術フォーラム21	6．最初と最後の頁 36－41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中谷伸生	4．巻 88号
2．論文標題 陳進の人物画・風景画・草花画をめぐる美術批評	5．発行年 2020年
3．雑誌名 南島史学	6．最初と最後の頁 1－15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　6件／うち国際学会　8件）

1．発表者名 中谷伸生
2．発表標題 江戸時代に描かれた淀川とその文化力
3．学会等名 関西大学おおさか文化セミナー（招待講演）
4．発表年 2019年

１．発表者名 中谷伸生
２．発表標題 大坂画壇と京の文化をめぐる研究と展覧会企画
３．学会等名 東西学術研究所国際シンポジウム（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 中谷伸生
２．発表標題 フェノロサ・岡倉天心と日本文人画の評価－西洋的価値観との対立をめぐって－
３．学会等名 東アジア文化交渉学会第11回年次大会（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 中谷伸生
２．発表標題 岡田半江と大坂の文人画
３．学会等名 京－大坂の美術とサロン文化1750－1900（ロンドン大学国際研究発表会）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 中谷伸生
２．発表標題 大坂画壇と2021年展覧会企画をめぐって
３．学会等名 The joint research project,Osaka Painting and Kyoto-Osaka Salon Culture.（Ｌｏｎｄｏｎ　Ｕｎｉｖ．）（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 中谷伸生
２．発表標題 蘆雪と大坂画壇
３．学会等名 蘆雪国際シンポジウム（チューリッヒ大学）（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 中谷伸生
２．発表標題 大坂画壇と京・大坂の文化ネットワーク
３．学会等名 ＫＵ－ＯＲＣＡＳ国際シンポジウム（関西大学）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 中谷伸生
２．発表標題 陳進と膠彩画（日本画）の文化交渉
３．学会等名 南島史学会（台湾・玄奘大学）（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 中谷伸生
２．発表標題 《蘭亭曲水図》の画題と日中の交流－益王重刻小蘭亭図巻から池大雅へ
３．学会等名 第10回東アジア文化交渉学会（中国・香港城市大学）（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 中谷伸生
２．発表標題 大坂画壇の今日的状況
３．学会等名 大阪近代美術研究会（招待講演）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計2件

１．著者名 中谷伸生	４．発行年 2020年
２．出版社 関西大学出版部	５．総ページ数 339
３．書名 風景論－東アジアから見る・読む・考える	

１．著者名 中谷伸生・陶徳民（共編著）	４．発行年 2019年
２．出版社 関西大学東西学術研究所	５．総ページ数 398
３．書名 山本竟山の書と学問－湖南・雨山・鉄斎・南岳との文人交流ネットワーク	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関